

すずかんの

医療改革の「今」を知る

「真の公聴会」

医療現場の生の声を
直接、国会議論へ！

第32回

去

る4月12日、「医療現場の危機打開と再建をめざす国会議員連盟」シンポジウムを開催しました。崩壊寸前の医療現場を立て直し、国民の生命と健康を守るべく発足した議連（超党派148名）にとって、「国民的な議論の喚起と必要な政策の実現」への第一歩です。

開催にあたり数週間で136通の意見が寄せられました。1千名超の来場者を中心に、首都圏のみならず青森、山形、兵庫、長崎の国公立病院や国立・私立大病院、民間診療所と幅広い医療機関から、がん、

脳外科、産科、小児科、救急内科などの診療分野の医療関係者、患者・ご家族からご発言いただきました。

青森県立中央病院の網塚貴介医師からは、「全国の過半数の新生児集中治療室で、多忙のため未熟児を抱っこして

授乳できずに一人飲みさせている状況」という、ショッキングな報告があり、都立府中病院の桑江千鶴子医師が、「産科では継続勤務が38時間にもなります。医療訴訟でも、過酷な判決が相次いで、心身とも打ち砕かれています」と涙声で訴える場面も。

3児の母、丹生裕子さんは兵庫「県立柏原病院の小児科を守る会」代表。昨年、同院小児科の消滅の危機をお母さんたちの働きかけで阻止しました。「安心して子供を生み育てられる地域であるために、医療は施し施されるのではなく、力を合わせ作り上げていくパートナー」と語ると、会場は賛意の歓声が上がりました。

議連がめざすのは、医療側と患者の対立ではなく、両者の信頼関係の再構築。「守る会」の快拳はまさにあるべき方向性を示してくれたのです。今回のコンセプトは「真の公聴会」。従来は役所のコントロールで表に出てなかった

国公立病院の勤務医（公務員）の生の声が、ダイレクトに世の中に発信されました。医師定員及び医療費削減の閣議決定を見直そうというコンセンサスを得ることもできました。医療難民と呼ばれる患者さんの期待にお応えするきっかけになればと思います。現役医大生はじめボランティアの方々の多大なるご協力なしに今回の成功はありえませんでした。今後も協力態勢が整えば各地で開催できます。ぜひお声がけ下さい！ともに未来を切り拓きましよう。

現場からの医療改革推進協議会事務総長、
中央大学公共政策研究科客員教授、参議院議員

鈴木 寛



すずき・かん ●通称すずかん。1964年生まれ。慶應義塾大学SFC環境情報学部助教などを経て、現職。教育や医療など社会サービスに関する公共政策の構築がライフワーク。